

後宮の棘5

～行き遅れ姫の帰還～

香月みまり Mimari Kozuki



アルファポリス文庫

一章

戦は膠着状態におちいつっていた。

本当に、一体董伯央は何を考えているのだろうか……

翠玉は戦場を櫓から見下ろして深く息を吐いた。

敵の連合軍の総司令にある董伯央は大国紫瑞国の宰相であり、大陸にその名を知られる知将だ。彼は小国である緋堯国をそそのかし、翠玉の夫である冬隼が禁軍の将を務める湖紅国に攻め入り、湖紅国の弱体化を謀ろうとした。

董伯央の狙いは、湖紅国を足掛かりに、隣接する南の大国碧相国を手に入れ、大陸全土を手中に収めることだった。

しかし彼の目論見は、翠玉の謀と湖紅軍の健闘により阻まれ、利用するつもりだった緋堯軍の勢力を半減させることとなった。

戦により力を削がれた緋堯国を完全に手中に収めることは彼にとつて造作もないこ

とであつただろう。

そこから彼が緋堯国を掌握し挙兵したのち、この緋堯国・湖紅国・碧相国の国境線までやってきたのは、随分と短期の内のことだった。

そんな勢いのままここまで手を緩めなかつた董伯央が、今ここにきて全く動かないのは不可解でもあつた。

とはいえ、開戦からおよそひと月半が経とうとしているものの、そのうち約半分が雨であつた。もどかしい日を過ごしている翠玉同様、彼もこの長雨を見つめて焦れているのかもしれない。

そう思っていたのに、雨が上がり晴天となつて数日、一向に彼らは動く気配を見せない。できるだけ早く、この戦を片付けなければならぬのに……

思わず唇を引き結ぶ。

よもやこれ自体が董伯央の思惑なのではなからうかとすら思えてきてしまふ。

先の緋堯国の戦いで、董伯央の大陸統一への目論見に気付くことができた。

そして、紫瑞国と長年にわたり海を挟んで大国の覇権を争っていた南の碧相国と西の響透国と連合を組み、ここまで来ることができた。

ここで董伯央の野望を挫くこと。それが第一の目標である。

そしてもう一つは……

「碧相国陣営、呂參謀より伝令です」

後方から声をかけられ、休戦となり閑散とした平野から視線を外す。

碧相国側につけている兵が、膝をついて札を執っているのを確認して、もうそんな刻限なのかと苦笑する。

碧相軍を束ねる将である兄の劉蓉芭と、兄の幼い頃からの側近の呂至湧とは毎日決まった時間毎に定期連絡をしている。

兄、蓉芭は翠玉が十五歳、彼が十八歳の頃に祖国である清劉国の世継ぎ争いに巻き込まれ、つい数か月前まで生き別れになつていた。国を追われた彼は碧相国へ渡り、そこで碧相王の信を得て、李周英と名を拝し、将の地位を得ていた。

蓉芭の目的は一つ……それは祖国であり、自分達を追いやつた異母兄の治める清劉国の帝位を奪還すること。

国境の北側に紫瑞国、南側に碧相国、そして西側に翠玉の嫁いだ湖紅国がある清劉国は、今回の戦のさなか沈黙を守っている。

今回の戦で紫瑞国が、緋堯側の国境から碧相国と湖紅国を討ち果たせなかつた場合、次に彼が狙うのは同じく両国を国境に持つ清劉国であろう。

直情的で愚鈍な今の清劉帝では、緋堯国と同様に董伯央の掌の上で転がされるに違いない。

西側の隣国である緋堯国を取られ、今度は東側の清劉国を紫瑞国に取られてしまえば、両国に挟まれる湖紅国は窮地に陥る。

それは大国とはいえ碧相国も同じだ。

故に、早急に清劉国の実権をこちら側の手中に置かねばならない。

碧相王の後ろ盾があり、湖紅国にも翠玉という伝手のある荅芭が帝位に就けば、大陸統一を目論む紫瑞国を抑え、睨みを利かせることができるのだ。

その機会となるのが、おおよそ一年後に行われる、清劉国の皇帝の即位十年の節目を祝う祝賀行事である。

それまでに、この戦を終わらせて、紫瑞軍を退けねばならないのだ。

戦況が停滞すれば、どうしても焦りが滲み出てきてしまう。

「聞くわ」

伝令に身体を向けると、彼はもう一度深く頭を下げた。

「晴天三日目、今までにない事が起こるかもしれない。注意されたし。以上です」

「なるほど……ご苦労様。下がっていいわ」

伝令の言葉を聞いて、その言葉を噛みしめる。

軽く手を振れば、彼は一礼して下がっていった。

「たしかに、ここ三日、雨は降ってないですけどね」

どういうことでしょうか？ と首を捻ったのは、姿を隠して戦場を訪れた翠玉の護衛として同行している華南だった。

「彼等の策が雨ではできないものだった可能性があるってことなのかもね。ねえ冬雫、今朝の戦場の土壌はどんな感じ？」

肩を竦めて華南に説明をしながら、槽の縁に手をかけて戦場を眺めている冬雫に声をかける。

「だいたい乾いているな。まだ所々柔らかいが、この日差しなら午後には全て乾くだろう」

「どうだ？ と彼は自分の横に控える泰誠にも意見を求めた。

「そうですね。砂埃が立つほどではないと思いますけど」

泰誠も頷いた。

「そう、じゃあ午後が勝負時かもね。ならば早い内に、各指揮官たちに懸念は伝えておきましょうか」

そう言った翠玉が、各部隊への伝令達を集めるように命じたのだった。



予想通り、事態が動いたのはその日の正午を過ぎた頃だった。

「敵軍後方部隊の中に、いくつかの大きな影を認めました」

見張りの兵の声で、翠玉は地形図から目を離して、すぐさま櫓の縁に向かった。

「あれは……雲梯!？」

同様に縁に手をかけて確認をした冬隼が、すぐにその姿を視認した。

「三基はいますね」

低い声で泰誠も呟いた。

櫓から見渡す敵軍の最後方の部隊、否、そのさらに後方の天幕群の影から姿を現したその大きな物体は、書の中や話では見たり聞いたりしたものであったが、実際には初めて見るものであった。

遠目では、まだ台車のついた四角くて大きい物としか認識のできないあれが、雲梯という城門や城壁攻略に使うものらしい。

戦場経験が豊富な冬隼や泰誠が一目で分かったということは間違いないだろう。こちらに向かつて進んできているように見えるそれは、その大きさからは意外なほど進みが早い気がする。

そして目を凝らしてみれば、その雲梯の前を先導するように並ぶ黒い点の集合体に、翠玉は声を上げた。

「まずいわ！ 奴等、騎馬で一気に引いて突っ込んでくる気よ！ 冬隼、アレを使うわ！ お願いわ！」

声を張り上げて冬隼を振り返ると、彼は落ち着いた様子で腰に剣を差し込む。

「俺は中央に降りる。騎馬部隊を出すぞ！ 泰誠、ここを頼む！」

「御意」

泰誠の言葉を聞くか聞かないかの内に、冬隼は櫓から降りていってしまった。

「伝令！ すぐに全指揮官に関塞守備の陣形につくよう伝えて！ 基本は各陣営の防衛線を守ることを、無理はするな！ 以上！」

手短に後方に控えていた伝令に伝えれば、彼はすぐに礼を執り、冬隼を追うように櫓を降りていく。

「降着！ 華南！ 弓兵部隊を関塞下と、城壁上部に展開させて！ そして補給に

行つて、例のアレを中央軍に速やかに配して。種の準備も指示して！」

「はっ！」

「承知！」

そして華南と隆蒼が返事をして、槽やぐらを降りていく。
「なるほどね」

翠玉は槽の縁を強く握りしめながら唸る。

彼等が、動かなかつた理由に合点がいった。

彼等のもとの狙いは、この堅牢な関塞をもつ甘州府を陥すことだったのだ。

しかし長雨により泥濘ぬかるんだ地面のせいで、重量のある雲梯うんでいを運ぶ車輪が動かなかった。

そして久しぶりに晴天が続いた今日、その条件が揃い——董伯央の策が動き出した。
そういうことなのだ。

雲梯うんでいを先導する敵の騎馬部隊きばぶたいは、ものすごい速さでそれを引きながら、我が軍に突入してきた。自軍の騎馬部隊きばぶたいが素早く反応できたことが功を奏し、なんとか、こちらの防衛線で食い止めることができている。

そこまで来ると、雲梯うんでいの全貌は翠玉のいる槽やぐらからでも目視で確認できるようになっ

ていた。

「随分立派なものを隠していたわね」

翠玉が唸るように呟けば、秦誠も神妙に頷いた。

「紫瑞国も緋堯国も古くから木材資源は豊富ですから、こうした物を作るのは得意です。すね。なかなかの大作です。少しでも近づかれたら、後方に畳んである梯子はしごを伸ばして、城壁じょうへきに架けてくるでしょうね」

そうなれば、たちまち州府が、州都が、戦場になる。

ほとんどの民と文官たちは避難しているとは言え、それでも全てではない。

丸腰の非戦闘員の犠牲は計り知れない。

「失礼いたします。ご命令の通り弓兵の配備と、補給の指示が完了いたしました。殿下の部隊も中央部隊と合流しております」

華南が戻り、報告をする。

隆蒼は、現場に残っているのだろう。

「ありがとう。とにかく、準備が整うまで、なんとか持たせないといけないわ。他の左翼と右翼はどう？」

「敵の進軍に少し足並みがばらつきましたが、すぐに立て直しました」

シャーンシャーンと、高い銅鑼の音が足元で響いている。冬隼が全軍に指示を出しているのだろう。

とにかく持ち場を全うしろ、時を待て、と鼓舞している。

ジリジリと、騎馬同士ぶつかり合い、押しでは戻す、そんな時間が続いた。少しずつ、少しずつ、敵軍の押しが強くなり、こちらが押され始めてくる。

「まだか」

珍しく焦れたように泰誠が呟く。

視線の端で、左翼に敵の増援が追加されたのを確認して、この隙に敵軍が湖紅軍と碧相軍を分断しにかかっていることを理解する。

しかし今、碧相軍に増援を送ることはできない。

至湧が、兄が、董伯央の思惑に、湖紅軍の現状に気づいてくれることを願うしかない。おそらく彼等の場所から、雲梯の姿は視認できていないはずだ。

今現在、碧相側の戦場がどうなっているのかも確認できないが、きっと董伯央のことだ、彼等が湖紅軍の援護に動けない状況も作っているだろう。

間違いない董伯央は、そこにできた隙を突いてくるはずだ。

なるべく早く、動きたい……

額から頬へ汗が伝う。



「あれは……雲梯か？」

時を同じくして、碧相陣営の櫓でも紫瑞・緋堯連合軍の陣営から、尋常でない速さでその大きな影が湖紅陣営の関塞に向かっているのを確認して、至湧は声を上げた。

「えらい速さだな！ 奴等、関塞を狙っているのか！」

隣に立つ主君もそれを視認すると同時に、縁を掴む手に力を入れたのが分かった。彼の頭の中に、奴等の狙う関塞の最上部の櫓に詰めているであろう妹の顔が浮かんでいるのは、考えなくても分かった。

あれが届けば、翠玉の居場所は途端に最前線となるどころか、激戦の場所となる。

「騎馬が雲梯を引いていますね。奴等、あのまま関塞に突っ込んで雲梯を架けるつもりですね」

側に控えていた部下が、目を凝らして呟く。

「やはり、動いてきたか」

読み通りではあった。

午前の内に翠玉には伝令を送り、何かしらが起こる可能性を示唆しておいた。彼女からも、十分気をつけると返答があったから、きつと備えてはいただろうが、これほど唐突な動きにどれだけ早く反応出来たであろうか。

「援軍を出したいところであるのだがなあ」

苦しげに呟くのは主君である。

それに至湧も同意の意を示して唇を嚙む。

実は少し前、碧相軍側でも事態が動いたのだ。

現れたのは、長い歴史を誇り、最強と謳われる紫瑞軍の戦車部隊である。

馬に台車を引かせて、その台車に兵が二人乗り、一人が防御と馬の操縦を担当し、もう一人が攻撃を担当する。

恐ろしく機動力があり、そして攻撃性も高い部隊だ。

この地で刃を交えてすでに数日。

今までその気配すらなかったために、存在を忘れていたほどだったのだが。ここに来て突如姿を現し、碧相軍に襲いかかってきたのだ。

紫瑞軍と長く海上戦を繰り返してきた碧相軍であるが、今回は陸戦ということもあ

り、いつもと異なる戦になることを想定して対策は講じてきた。

こちらも戦車部隊を準備してきたのだ。

しかし問題が一つあった。

碧相軍史上、実戦で戦車部隊を使うのは初めてだったのだ。

歴史の長い紫瑞軍の戦車部隊相手に、その侵攻を食い止めるのに精一杯というところである。

なるほど、この戦車部隊と雲梯うんていを使ったがために、董伯央はこの広い大地と関塞かんさいのある場所を選び、土壌が乾くのを待った。

こちらの弱点をしっかりと掴んでくる辺り、本当に狡猾だ。

「とにかく我らは目の前の、戦車部隊を黙らせることが先決だ。おそらくうちが関塞の防衛を優先して湖紅軍に援軍を出せば、奴等の思う壺だ。とりあえず右翼には、湖紅軍との連結部分の死守だけは抜かるなと伝えろ」

「はっ！」

主君が的確な指示を飛ばしていくのを見ながら至湧はもう一度唇を嚙んだ。

ここが両軍にとっても正念場である。

おそらくそれは、関塞かんさいにいる翠玉も感じていることだ。

姫さま、どうかご武運を。

奥歯を噛みしめ、至湧は彼女の無事を願った。



ジリジリと日差しが照る。

そんな中、翠玉は縁を握りしめたままその時を待った。

その間に、碧相軍側に送った伝令が、碧相陣営に辿り着かないままに戻ってきた。

伝令が碧相軍まで辿り着けなかったということは、左翼も激戦となっているということだ。

彼の話では、碧相側には紫瑞軍自慢の戦車部隊が姿を現し、現在交戦中のようにだと。

それだけで、碧相軍も厳しい状況にあることがわかる。

やはり、ここは自軍だけで、なんとかしなければならぬ。

「準備、完了したそうです！」

その時、下の隆蒼と何やら合図を送り合っていた華南が声を上げた。

「銅鑼を！」

それを聞いた泰誠が鋭く告げる。

すぐにガシャンガシャンと、腹に響くけたたましい銅鑼の音が響いた。

至近距離で聴くのは少し耳が痛むが、致し方ない。

「城壁で指揮をとるわ！ 泰誠！ 頃合いは任せるわよ！」

銅鑼の音が落ち着くと、すぐに剣を腰に携えて、泰誠に声をかける。

「承知いたしました。くれぐれも！」

「分かっているわ！」

無茶をするなど言いたいのだろう。

櫓の梯子に足をかけると、彼にニコリと笑いかけてスルスルと滑り降りる。

下では、すでに翠玉の行動を予測していた華南が待っていた。

「いきましよう！」

声をかければ、彼女もうなずいて先導するように前を走り始めた。

城壁にスラリと並んだ弓兵達の脇を走り抜けて、隆蒼と合流する。

戦場を臨めば、騎馬部隊が前衛に出て食い止めながら、少しずつ後退しているところだった。

近づいてきた雲梯は三基。その内の一基がより近いところに迫っている。

失敗を考えた上で、一基ずつ近づいてくるつもりらしい。一基でも十分な大きさである。たった一基ですら架けられてしまえば、多くの敵の侵攻を許すことになるだろう。そんなことはさせない。

ジッと、戦場を見つめる。

「補給兵が良い仕事をしてくれているわね」

眩げば、隆蒼が隣で頷く。

彼等を育てたことがこんなに心強いことになるとは思ひもしなかった。

見渡せば、自軍の陣営には、至る所に藁を丸く固めた塊が転がされている。

それをすべて設置したのは過去に落ちこぼれと呼ばれていた、彼等である。

「終わったら褒めておかないとね」

一人笑った時、ジャーンと、銅鑼の音が鳴った。

「火を以てー」

すぐに隆蒼が声を上げると、整然と並んでいた弓兵達が、弓を構えた。

その弓の先には白い布が巻かれている。

弓兵達の足元に控えていた兵達が、自身の足元に置いていた燭台を持ち、その布に近づけた。ほぼ同時に全ての弓兵の矢に火がまわった。

「射てー！ー」

隆蒼の号令で、その火球は一斉に城壁の下、自軍の陣営の中に置かれた藁の塊目掛けて飛んでゆく。弓兵の精鋭部隊を揃えただけある。外す者はいなかった。

そして、冬隼の指揮も見事だった。すでに城壁の下にいた兵達は撤退しており、矢に巻き込まれる者はいなかったらしい。

火をつけられた藁の山は、一気に燃え上がった。

敵軍にしてみれば、突然相手の陣営から火が出てきて、訳が分からない、そんなところだろう。雲梯の進度が目に見えて遅くなった。

見事な出来の雲梯だが、その作りは木材である。

火が燃え移ってはどのようなもない。

このまま進んで良いのだろうか、雲梯を引く馬たちにもそんな躊躇が見られた。

その隙を逃さないのが冬隼だった。

自陣の中から騎馬部隊が躍り出る。

二十騎ほどの塊が二十組。

それは、時に敵の歩兵を蹴散らして、時に相手にせず、雲梯に向かって進む。数人は松明を手にも、向かってくる敵を威嚇しながら道を開けて行く。

そうしてグングンと雲梯うんでいに近づいて行った騎馬きまは、その射程に入るや否や、次々と懐に入れた何かを雲梯うんでいに投げつけると、潔く向きを変えて離脱してくる。

ガシャンガシャンと、陶器とうきが割れる音が響き渡り、何が起こっているのか分からないといった様子の敵兵が啞然うぜんとしているのを尻目に、彼等は一切未練などないという様子で、自陣へ一目散に戻ってくる。

その時、一番奥に位置する雲梯うんでいから、ボンと破裂音が響いた。同時に上がったのは大きな火柱で、それは一気に巨大な雲梯うんでいを包んだ。

続いて、戻ろうとする騎馬部隊きまばを追って来る敵軍の足元からも破裂音と火柱が上がリ、混乱を招いていた。

そして一際ボン！と大きな音が鳴り、中央の雲梯うんでいも火柱に包まれると、それに触発されたように一番手前の雲梯うんでいも火を噴いた。

「あらら、思いの外上手くいったねえ。弓兵部隊の腕の見せ所はここからだったのねえ」

風に乗せられてくる熱い空気を頬に感じ、火柱の明かりを眺めながら翠玉は拍子抜けしたように息を吐いた。

目の前に整列していた弓兵達が、ゆっくりと弓を下ろした。

彼等の持っている弓は、先程のものとは違い、長距離用のものである。

本来ならば、火矢で今度は雲梯うんでいを狙うつもりだったのだが、それをする間もなく騎馬兵達ばへいが着火に成功した。

「これの出る幕は無かったわねえ」

少し残念そうに翠玉が陶器とうきを持ち上げると、隆蒼が呆れたように「なんで持っているんですか？」と聞いてきた。

「んー、もし失敗して、雲梯うんでいを架けられそうになったら、登ってくる奴等に、火を点けてぶつけてやるうかと思って」

そう言つて翠玉は、まだあるわよ！と自身の後ろを指差す。

彼女の後方には、箱を抱えた補給兵が二人立っていた。

「いっぱい作っちゃったからさあ！」

あははと軽く笑つて彼女は補給兵に「必要無かったみたいだから、補給庫に戻しておいて！」と指示を出した。

翠玉が持っているものは、円柱状のただの陶器とうきの筒だ。

一見水筒みずびんなんかによく似たように良さそうなのは、中に油が差し込まれている。そして栓せんをするように、こより状にした布をひたしてある。

その布に火をつけて目標に投げれば、当たると同時に陶器が割れて油が飛び散り、火が燃え移る。

割れなくても火がついた布が陶器の中で燃えて、熱によって陶器が爆ぜる。

騎馬部隊はそれを大量に抱えて雲梯に突っ込み、目一杯投げ込むのが役割だった。

可能なら松明で火をつけた上で投げ込めとは言ってあったのだが、まさか三基とも上手いこといくとは思ってもみなかった。

火がつかなかった雲梯に関しては、この城壁から狙おうと。下に配備した弓兵からも火矢を射るつもりだったのだ。

堅牢な作りである雲梯だが、素材は木だ。

火を警戒して湿らせてあったとしても、油を幾重にも撒かれて火をつけられ、重要な滑車部分が長時間火に燻られてしまっただけでは進むこともできないだろう。

戦場を臨めば、敵軍も燃え盛る雲梯を利用することは諦めた様子であった。速やかに後退して行くのが見える。

自軍は防衛線まで追いつがるが、それ以降は深追いをすることなく落ち着いた様子で、持ち場を立て直したらしい。

気がつけば、右翼や左翼も持ち直している。

◆ どうやら董伯央の仕掛けてきた作戦には勝つことができたらしい。

冬隼が櫓に戻れば、翠玉は何事も無かったかのような顔でそれを迎えた。

「よくあんな短時間で、完璧に準備できたわね！」

感心したように笑う彼女の頭に手を乗せて、次いで労うように肩を抱く。

「補給の連中がよく動いてくれたよ。しかも兵達が自ら作った代物だからな、説明しなくても使い方は全員が完璧に理解していたから話が早かったさ」

冬隼が「これを、雲梯にぶつけるのが任務だ」と言っただけで、すぐに騎馬部隊の兵達が「では火も必要ですね」「できるだけ中身を無駄にするな」「滑車に投げ込めば、破壊出来るんじゃないか？」と自分達で考えながら準備を始めたのだ。

彼等自身も雨の日を過ごさず中。

ある日はこの陶器となる土を捏ねて形にして、またある日は焼き上がったそれに油を差し、またある日は布を裁って、こよりにして詰め込んだのだ。

自分が作った物が遺憾なく威力を発揮するためにはどうしたらいいか、短時間の中

で彼等は工夫を凝らした。

それが、雲梯を三基とも見事に破壊できたという結果に繋がったのだ。

「作って置いて良かったわ！ 隆蒼のおかげね！」

後ろに控える隆蒼に視線をむける。

「いえ、自分は……ただ翠玉様に聞かれたまでを伝えただけで」

急に水を向けられ、隆蒼は恐縮したように視線を逸らした。

翠玉が、暗器をはじめとする変わった武器の話を隆蒼に聞いているのは知っていた。

隆蒼は昔から武器に関しての知識が深い。他国の古の物など、時には自身で作っていることもあった。

そんなところが、華南には「陰湿な奴」と言われる所以でもあるのだが、その話の中で、何かが翠玉がこの策を思いつく糸口になったらしい。

今度は烈を捕まえて、何やら聞いているうちに今回の代物は完成した。

初めて試作品を見た時から、戦において非常に有効な代物だと思っただけのため、増産を許可したものの。

長雨により兵達の手が予想以上に使えて、陶器の土も油も底を尽き、これ以上の手配は無理だと悠安に泣きつかれるほどの数が出来上がった。

「しかし、こうも早く使う機会があるとは思わなかったぞ？」

何か察していたのか？ と聞いてみれば、翠玉は少し困ったように笑った。

「董伯央は大国の策士なのよ！ 彼は生まれも育ちも紫瑞国でしょう？ そうであるなら無意識に彼に刷り込まれているのは、資源も兵力も豊富な彼の国独特の兵法だわ。派手な道具や上等な武器を惜しみなく利用した、まあ贅沢な戦い方ね」

だから彼が、何かしらの大物を使って派手にくることはなんとなく予想出来ていたのよ、と翠玉は笑った。

「片や私は小国の策士！ 私の師は、資源も兵も少ない中で、どう立ち回るか考えろと言う人だったわ。もちろん大国の策士のそうした心理を逆手に取ることも教えられたわ。だから今回は、こちらから派手なことは起こさず、相手の起こしたそれをいかにねじ伏せて心理的な痛手を食らわせるかってところを考えてみたのよ！」

それが、今日の結果！ まあすごく冷や冷やしたけど！ と彼女は自嘲した。

「今回のことで確信したけど、多分董伯央は、紫瑞の知王と言われた孔伯水の子孫なんだと思う。直接兵法を習っているのかもしれないわ。もしそうなら私は負けるわけにはいかないの。私の師である壁老師は、その孔伯水との知戦では無敗だったみたいだから、もし負けることがあったら老師に怒られちゃう」

老師、何度も自慢してたから、きつと彼に無敗だったのは相当こたわっていたと思うのよね〜と、最後は彼女自身が何かに納得して、話を終えた。

冬雫始め、その場にいた全員が言葉を失って彼女を見ていた。

なんだか衝撃の事実が沢山出てきたが……

こんな策士が、味方側の人間で良かったと心底思ったのだ。

結局その日は、雲梯の壊滅と共に敵軍は兵を引いていった。

追撃しても良いかとも思ったものの、碧相軍側には紫瑞国の戦車部隊が展開されている。下手に追撃したところを横から戦車部隊に斬り込まれるのは危険だと判断して、碧相側へ騎馬部隊を援護に出すだけにとどめた。



雲梯部隊が壊滅した。

遠目上がる三対の火柱を眺めながら、董伯央は唇を囁んだ。

報告をする兵達の話の聞いても、雲梯部隊が全滅した経緯——その全貌は明らかにならない。

破裂音がして次の瞬間には火柱が上がった……と。

敵の騎馬部隊が松明を持って近づいて来て。しかし、松明でない何かを投げ込まれたところで火が出たとは、一体どういうことだ!?

敵軍が何かの細工をしたのは明白だが、それはどういう代物なのだろうか。

東左によれば、紅冬雫には影が付いているという。

影特有の暗器の類かもしれない。

クソツ、東左がいれば!

一人毒づく。

紅冬雫に恨みがあると云っていたあの男は、その妻の行方を探ると云って、ある日忽然と姿を消した。湖紅軍が碧相軍か、指示通りに敵陣営にでも侵入したのだろうと気にもとめなかったが。

数日後、骸となって捕虜と共に送り届けられてきた。結局、皇太后付きの宦官であった際に得たという少しの情報以外、彼はなんの役にも立たなかった。

湖紅軍はまだまだ、未知の武器を隠しているかもしれない。そうであるなら下手な策は使えない。こちら側からの関塞攻略は諦める他ないだろう。

しかも、ここ数日の天候も明らかに思わしくないのだ。

今年の雨季は早いかもしれない。

そうなれば、後方に大きな川を抱える我が軍は不利だ。

奴等は以前の戦で水も操った。

そして、未だにその川の上流の治水は彼等が握っているのだ。

ここは引くべきだと、敬愛した師である祖父が言っているような気がした。

「小さき力こそ時に得体が知れない。それを不気味に感じたならば、その勘は合っている」

今際の際まで祖父が言っていた言葉だ。知王と崇められた彼が唯一勝てなかった、小国の知将ちしやう。彼はずっとその男に勝てなかったことが心残りだったらしい。

しかし、命だけはその男にも最後まで取らせなかった。

それは、祖父が自らの勘ともいえる感覚を大切にしていたからだ。

だから、孫の中でも一際優秀だった自分に言い聞かせたのだろう。

だが、まだ終わっていない。まだ、自分の作戦は途上なのだ。

そしてその決行は今夜。

明日の朝笑っているのは、自分であると確信している。

二章

突如動いた戦況と予想外の雲梯うんていの登場に気を張ったせいか、少し疲れた翠玉は自室で横になっていた。

事後処理は特にやる事が無かったので、少し休むことにしたのだ。

トロトロと微睡ましごむの中で昔懐かしい夢を見た。

「ここに赤ちゃんがいるの？」

母の大きな腹にしがみついてスリスリすると、内側からトントンと押し上げられるような感触があつて、慌てて頬を離して母を見た。

「ふふ、赤ちゃんに在るよって言われたわね！」

翠玉の頭を撫でて母が楽しそうに笑った。

今、トントンとしたのがどうやら赤子だったらしい。

先日、他の貴妃きひが産んだ赤子を見せてもらったのを思い出す。

あんな大きさのものがこの腹の中にいるのだと思うと、なんだかとてもなく怖く

感じた。

「母様！ 怖くないの？」

涙目になりながら母を見上げれば、母はクスクスと笑った。

「全然怖くないわ。貴方も兄様達もこうしてお腹の中にいたのだから。また可愛い宝物が増えるのだから、楽しみでしかたないわ」

そう言うって彼女はもう一度頭を撫でて、腹に寄せてくれた。

「貴方もいつか、この気持ち分かる時がくるわ。すぐくすぐく素敵なことなのよ」「私も？」

「きつと分かるわ。貴方はどんな母になるのかしらね」

楽しみねえくと母に頭を撫でられて、ゆっくりと目を閉じた。

コポコポ、ドクドク。

優しい音を聞いた気がした。

目を覚ませば窓から夕日が差し込んでいた。

少しばかり寝過ぎたらしい。

伸びをしてぼんやりと宙をみつめる。まだ頭が働かない。

久しぶりにハッキリとした夢を見た。懐かしい夢だった。母の腹が大きかった頃な

ので、弟が産まれる前、翠玉が四歳くらいのことだろうか。

たしかに、なんとなくあんなやりとりをした記憶が臑げにある。

あの頃は、大きくなったらすぐに誰かに嫁いで子供を産むのだと思っていた。

皇女として産まれた以上は政略結婚を覚悟していたし、祖国で蔑ろにされた挙句、

まさか二十五まで結婚もせずにいるなんて思ってもいなかった。

まして、子どもなんていつになることやら。

まあいずれは……冬隼とそういう行為もするようになったわけだし……

そこまで考えて、あれ？ つと首をひねる。

そういえば、ここに来てから、月の物がきていない気がする……

最後はいつだっただろうか。

多分、碧相国で兄の所に厄介になっていた頃だっただろうか……

そう考えると、それからすでにふた月は超えていないだろうか？

まあ慣れない戦場だし、緊張状態が続いているし、少しくらい遅れることは今までもあったわけだし。

そこまで言い聞かせて、それでもその疑念を無視することはできなくて、翠玉は腹に手を当てる。

いるのだろうか……もしかしたらここに。
そう思うと、じんわりと暖かい気持ちになる。
冬隼に……今夜話そう。

そして医者に診てもらってはつきりさせなければ。
少し考えて、翠玉は寝台から立ちあがった。

部屋を出ると、本部とは反対方向の廊下を歩いた。



すっかり日が落ち、外が暗くなった頃。

翠玉が本部へ戻ると、随分と色々なことが片付いていた。

自軍の兵力の損失状況と、武器の状況を確認する。あんな激戦だったにもかかわらず、損害が少なくてほっと息を吐く。

「これで奴等が引いてくれるといいのだけど。様子はどうか？」

情報を求めて泰誠を見るが。

「変わりはないですね」

首を横に振られた。

「……仕方ないわね」

その時部屋の扉を叩く音が響いて、全員の視線がそちらに移った。

姿を現したのは一般の兵士の格好をした……影の一人。

冬隼と、翠玉、泰誠はその者の素性を知るため、互いに目配せをする。

「報告だな。ご苦労」

冬隼があたかも何かを頼んでいたかのように手招きすると、その男は堂々と室内に入ってきて、冬隼の耳元に顔を寄せる。冬隼の顔がみるみる険しくなるのがわかった。分かった。少し待て。

影の男を手で制して、冬隼は顔を上げると険しい顔のまま、一同を見渡した。

皆が彼に注目して静まる。

「この男は市中に潜ませて情報を集めさせている者の一人だ」

全員に届くように声を張り、皆が注目しているのを確認すると冬隼は、影の男に「今の説明をもう一度頼む」と促した。

男は大して驚くことも怖気づくこともせずに淡々と口を開いた。

「市中で緋堯国方面から来た幾人かの商人の話を聞いてみたところ、彼等の多くが扇

土付近の山林地帯で野営をする部隊を見たと言っておりまし

「なんだって！」

「扇土って！」

「まさか！」

彼のその言葉だけで、部屋にいた者全てが息を呑んだのが分かった。

翠玉自身も知らず内に、息を詰めていた。

扇土、それは緋堯国の国境の都市である。

そこからこちらに向かってくるとなれば、自ずと通る道は一か所。

前回の戦場であった、緋堯国とのもう一つの国境線のある、あの平原である。

奴等は、あちら側にも兵を隠しているというのだ。

そうであるならば、頃合いをみて敵軍はあちらの平原から我が国の国境を越えて進軍してくるつもりで、もしかするとこちらの戦場が囿おとりだったのかもしれない。

敵軍が国境を越えて進軍してきた場合、彼等は今度はこの甘州府を裏と表の両方から包囲することが出来るだけでなく、湖紅軍の本隊を甘州府に閉じ込めたまま、湖紅国の領土を侵攻することが可能になってしまふ。

「数は？」

短く聞けば、男は翠玉の顔をしっかりと見つめて……

「商人達の話をもとめるとおおよそ三万ほどかと」

三万………思った以上に多かった。

「そう………わかったわ。他に情報は？」

「ございません。特に問題が無ければ失礼させていただきます」

もう役目は終わったと言わんばかりの男に、冬隼が。

「分かった。ご苦労」

と声をかければ、男は一礼して部屋を出て行った。

「どうなさいます？ 我が軍はあちらには一万ほどの兵しか置いていませんよね？」

確認するように泰誠が話し始める。

先の戦いで湖紅軍が大勝した地故に、今回董伯央が戦場にすることをあえて避けたのだとは理解しつつも、冬隼は国境線が無防備にすることを良しとはしなかった。

董伯央のことだ、何を考えているのかわからない。

そう考えた翠玉も冬隼の判断に同意した。そうして、貴重な兵力をそこに置かざるを得なかったわけだが、今回は功を奏したようだ。

そこは、歴戦の兵である李蒙が参謀の直下部隊を率いて守備に当たっている。

その数一万。

精銳達とはいえとてもじゃないが、三万には太刀打ちできない。

「援軍を送らないと……おそらく、伯央がそれをするなら今夜だわ！」

翠玉が声を上げて冬隼を見る。彼も理解していると領いた。

だが、こちらの戦場も明日どうなるか分からない。あまり兵は減らせない。

そうであるならば……

「冬隼、あなた……というか、泰誠の直下の兵を私に一万貸してくれない？ 彼等と私なら、あそこで上手く立ち回ることができる。兵一万くらいの差はなんとかできるわ！」

冬隼をじっと見つめる。その厳しい表情は変わらない。おそらく彼は最初に影から話を聞いた時から、こうするしかないと分かっていたのだ。

翠玉を前線に出したくない。目の届かないところで戦わせたくない。

そう彼が葛藤しているのがよく分かった。

「仕方ない。翠玉、華南と隆蒼を連れて李蒙の援護に向かえ！ とにかく国境を渡らせるな！」

「承知したわ！ このこと、碧相軍とも共有しておいて！ 出発は半刻後よ！ いい

かしら？」

「承知しました」

華南と隆蒼が意を示し、それを受けた泰誠が自身の部隊に命を出しに動き出した。



「頼むぞ」

馬上の翠玉に声をかけると、彼女から驚くほど強い決意を含んだような視線が向けられた。

その瞳に冬隼の胸が騒いだ。

まるで覚悟を決めたような、意思の強い瞳の奥で彼女は何を考えているのだろうか。口を開きかけて、答えを聞いてしまうのが怖くて口をつぐんだ。

「そんな顔しないで、必ず守り抜いて明日の夜には戻るから」

それでも彼女は目敏くて、困ったように笑ってその膝に置いた手を握り返された。どうやら自分は、随分情けない顔をしていたのだろう。

「私、まだやらなきゃいけないことがあるから死んでなんていられないのよ」

だから、無茶はしないわ、と彼女は言っ、前を見た。

「華南、隆蒼、行こう！」

「はい！」

二人の返事と共に、彼女の愛馬である無月むつきが動き出して、するりと手が離れた。隆蒼の号令とともに、隊列が動き出す。

一万の兵は夕刻から夜の道を二刻ほど駆けていく。

それまでに敵の奇襲が李蒙の軍を襲わないとも限らない。

もし彼等が到着した頃に李蒙の部隊が壊滅していたら……

その先は考えたくなかった。

この話を聞いた時、どうにか翠玉をここに留められる策は無いものかと一瞬の内に思案した。

しかし李蒙軍は翠玉の直下部隊。

極め付けにあの地の特性を誰よりも理解しているのは翠玉だ。

彼女以外に適任はいない。それは彼女もよく分かっていた。

だから、冬雫が苦しまぎれに翠玉を外す采配をしたなら、積み上げてきた物を否定されたと感じた彼女は猛烈に怒っただろう。

◆
駆けて行く隊列を見送りながら、どうか無事でいて欲しいと願った。

緋堯国の将、丘江きやうかうは暗闇の中で息を潜めながらその時を待っていた。

川を挟んだ遙か先に、ほんやりとその姿を映す天幕群が、自分たちの今日の獲物である。

必ず仕留めてみせる……この地で。

数ヶ月前に丘江は、この地で湖紅国に辛酸しんさんを舐めさせられた。

訳がわからない、將軍の妻という女に騙されて、そしてさらに訳の分からない策にハマり、同胞どうぼうを半分も失った。それだけでは済まなかった。

その戦で弱体化したところを隣の大国——紫瑞国に突かれた。

自分達の仕えた将は皇帝の命と引き換えに、奴等に降る道を選んだ。

我が国はこの戦で武功を上げて、せめて王政の存続だけでも認めて貰わねばならない。

そのためにも誰もが認める結果が必要で、そして出来ることなら、その発端を作っ

た湖紅軍に痛い目を見せたい。
前回痛い目を見せられた川には、紫瑞軍が作ったという最先端のカラクリによって簡易的な橋がかけられている。

それを見る度に技術や資源の発展が桁違いの大国の力に慄き、唇を嚙む。
あの大国に我が国が勝つ術はない。

それでも、譲れないものはある。

丘江は、すぐにこの奇襲作戦に志願した。

夜陰に紛れた奇襲など、卑怯な手だと思っ者もいる。

しかしそんなことを言っていられないほど、我らの湖紅軍への恨みは深い。

この地に奴等の血を。

そしてここから一気に奴等の本隊の背中に襲いかかってやるのだ。

そこに、あの女がいれば、必ず仕留めてやる。

そしてその骸を彼女の夫である総大将のもとに差し出してやるう。



早駆けは得意だった。息の合った無月の背中なら尚更だ。

それなのに今日はなぜか息が上がった。

目的地が近づくと従って、腰にも鈍い痛みが走り出した。

これは、いったいどういうことなのだろうか。背中を汗が伝う。

まるで、自分の身体ではない、そんな気さえする。

もしかして、これが妊娠の影響なのだろうか。

無意識に下腹に手を当てる。

なんの膨らみもないそこは、いつも通りである。

もしかしたら妊娠したのではないか、それに思い至った翠玉は、自室を出た後、州

宰と家族、その側近のためにある書庫へ向かった。

ここへきてから、翠玉も調べ物で何度か使っていたので勝手は知っていた。

いつもは一切手を触れなかった医師の棚に向かうと、女性の身体に関する書物をいくつか引っぱり出して読んでみた。

妊娠についての記載は数多くあったが、初期に関する症状は様々で個人差も大きいと書かれていることがほとんどだった。

その中で自分に当てはまるものといえば、月のものが来ていないことと、時々眠た

いことくらいであった。

決定的な情報はない。もしかしたら勘違いかもしれない。

それでもとにかく今夜冬雫には相談してみよう。

そう思っただけで書物を片付けて本部へ戻った。

しかし、奇襲の話聞いて、すぐに自分が指揮して向かう案件だと理解した。

一瞬、お腹にいるかもしれない子のが頭を過った。

しかし、今ここで確実でもない話をして医者に診てもらおう時間などない。李蒙と

一万の兵の命がかかっている。すぐに準備に取り掛かった。

それでも、準備をしながら、少し怯えている自分がいた。

もし、妊娠していたら。私が戦うことはこの子にとって悪影響ではないのだろうか。

馬に乗って大丈夫なのだろうか。

誰かに聞きたい。しかしこんな戦場にそんなことを知る者はいない。

なにより時間がない。私にもそんな時が来ると笑った母が、生涯を通して愛した李

蒙を見捨てることは出来ない。

「もしも、そこにいたのならごめんさい。私は母親失格かもしれないわ」

目の前に最後の街の明かりが見える。

「ごめんさい」

もう一度小さく呟いて腹を撫で、その手を手綱に戻した。

目的地に近づくにつれて、焦燥は強くなる。

暗い夜道のはずなのに、虫の鳴き声は鎮まり、代わりに殺伐とした空気が風に乗っ

て迎えにきたような、そんな気配がした。

しばらくすると、小さな村から急いで荷物を抱えて出てくる村人の姿が見えて、そ

してわずかに戦特有の喧騒が馬の蹄の音に混ざって聞こえてくる。

もう始まってどれくらい経つのだろうか。

早く合流しなければ。

焦れば焦るほどに、翠玉の息は上がった。



一万の兵を率いて、ここに配されることを命ぜられた時から、李蒙はこうしたこと
が起ることを予測していた。

敵の目論見が読めない以上、この地が奇襲の標的となる可能性は十分に理解できた。

そして、ここに多くの兵を当てられない理由も。そのため、自分が選ばれた意味もわかっていた。

一万の兵と、策でなんとしても凌がなければならぬ。

それが始まったのは、日が落ちてあたりが闇に包まれた頃だった。

その気配を李蒙は敏感に察知していた。

前線を退いてから数年。いまだその勘は衰えていなかったらしい。

結局どこまでも自分は武人なのだ、苦笑した。

しかしその冴え渡る勘は、都合の悪いことも察知する。敵の数が尋常ではないと、地面の揺れが教えている。このまま作戦決行まで持つていけるだろうか。

さてどうすべきか。

天幕の外からは兵達の騒ぐ声が聞こえている。

今日は予めこうなることを予測していた。ゆえに彼らもただ馬鹿騒ぎしているわけではない。みな、鎧を当て、剣を持つているはずだ。

「奥方様の予測は当たりましたね」

同じように大地のわずかな揺れに神経を向けていた、夏景眞かけいしんが呟く。

彼は、長く副官を務めてくれていた男だ。同じように死地を潜ってきた彼にも、今

自分と同じものが見えているのだろう。

「ああ、流石は翠玉様だ」

誇らしい思いで頷く。

自分の半生をかけて愛した女性の娘が、まさかこれほどまでの才を持つていたなんて。そして自分が育てた男の妻となり、直接的に仕えることが出来ることは、李蒙にとって喜びでしかない。

隠居いんきょして、ぼんやり日々を過ごして、いずれは天に召された彼女のもとにいくものと思っていた自分に突如もたらされた使命は、その彼女に似た娘を見守ることだ。

そして有事の際には盾たてとなることだ。

「殿下は良い方を娶めとられましたねえ」

景眞が感慨深い様子で呟く。

彼はずっと自分の下にいた。

それこそ冬殿下が四つか五つ、剣を持ち始めた頃から知っている。

幼い頃から真面目で勤勉だったあの子供が、立派な武人となり、将となるのを親のような気持ちで見っていたのだろう。

殿下が翠玉様を……妻を娶めとったと聞いた時には二人で祝酒だと杯を交わしたのも覚

えている。
まさかその翠玉様がこれほどまでに武に才のある者だとは、その時は夢にも思わなかったが。

「必ずこの策は成功させねばならん。命に替えても、大地の揺れが少しづつ間近に迫ってきた。」

そう思った矢先。

カンカンと敵襲を知らせるけたたましい鐘の音が響き渡った。

斥候の報告では敵の奇襲部隊は三万ほどだという。対してこちらは一万だ。随分と厳しい戦いになるだろう。

◇

「袁徒隊壊滅！」

「曾峰隊より援軍要請！」

「晏紀隊後方へ撤退」

「っ……やはり厳しいか！」

敵軍の侵攻が始まってから約半刻。

もたらされる情報は、悪いものばかりである。

予測はしていたが、随分と状況は芳しくない。

三万の兵とはいえ、おそらくこちらに当たってきているのはせいぜい二万だ。もう一万は後方で様子を見ている。

それなのに何故こうまで押されているのだろうか。

布陣も兵の資質も劣っていないはずなのに。

「どうやら、彼等は緋堯軍のようです。後方に堯雅浪の旗印を確認したと、別働部隊から報告がありました！」

情報収集に行っていた景真が戻ってきた。

「なるほど、そういうことか」

それを聞いて李蒙は唖る。

堯雅浪——緋堯国の幼い皇帝の叔父で、現在の緋堯国の事実上の統治者だ。

先の戦で人質に取ったと思っ込んでいた翠玉様にまんまと出し抜かれ、大敗を喫した。

「前回の戦の仇討ちか。それは士気が上がって仕方がないだろうなあ」

前回同じ戦場で散々な負けを喫している彼の国は、それはそれは勇んでやってきているだろう。

「これは、色々と覚悟をしないといかんな。しかしアレはどうだ？」

「敵の後方部隊が射程に入りません！」

悔しそうに答える景眞の言葉に唇を噛む。

「くそっ、なんとかして奴等もこちらにおびき寄せられんものか！」

「火でも使いますか？」

景眞の提案に一瞬言葉を呑み込む。

確かに、今押されている状況は打開できるかもしれない、しかし……

「あの陶器ちぎの代物か？ 明るくするのはまずい。策が使えん」

「ではどうするのです!？」

李蒙は考える。

一時的に敵をかく乱させるために、大きく当てにしている策を捨てるべきか。

しかし、策なしで三万にどう立ち向かうのか……

思索していると、天幕の入り口の幌ほろがざざりと跳ね上がる。

「ご報告申し上げます。援軍到着！ 援軍が到着致しました！」

転がり込むように兵が走り込んできた。

「援軍だ!？」

にわかには信じられずに眉根をよせると、すぐにガシヤンガシヤと鎧の擦れる複数の音が近づいてきた。

「これは！ 翠玉様!!」

「李蒙！ 間にあったわね！ すぐに状況を教えてちょうだい!!」

小柄ながらも、凜としたその姿は、間違いなく将の風格を纏っていた。

この戦でまた一回り大きくなられたのだろうか、彼女の内側から覇気はきが溢れているような、そんなものを李蒙は感じた。

略式の礼を執り、すぐに翠玉を地形図に誘うと、彼女は碁石ごいしの位置を確認して「よくここまで持ちこたえたわね!」とつぶやいた。

「わが軍の兵力は一万、対する敵軍は三万といったところです。現在緋堯軍は戦場を縦断する川に橋を渡して西側に一万を残し、二万がわが軍と交戦中です」

「なるほど、後方の一万は動く気配はなさそうなのね?」

「面目ありません」

どうにか全軍を前に動かそうと、誘い出すように働きかけてもみたものの、二万の

兵を一万弱で相手しつつ、戦線を維持することは容易いことではない。

おそらくそんなことは翠玉もよくわかっているのだろう。

「仕方ないわ！ むしろよく耐えてくれたわね」と周囲の者たちを労うと、思案するように、戦場図に指を這わせていく。

「まだ見つかっていないのよね？」

低く問われ、頷く。

「五百ほど、待機をさせております」

「そう……ならばもう千くらい投入して、こちらは増援を高らかに知らせて、残りの一万の前に出てきてもらいましょか！ 前にさえ出てきてもらえたら、一気に囲んでしまいましょー！」

長い夜になりそうね？ そう笑って彼女は肩をすくめた。



「眠れませんか」

関塞から、戦場と敵軍の野営地を眺めている冬隼を見やり、泰誠は顔を出した。

「ああ、一度床にはついたのでがな」

どうも落ちつかないんだ。

そう言って冬隼はまた昼間の戦場に視線を戻す。

「無理もないですね」

そう息を吐いた泰誠は、冬隼の隣に肘を置く。

このところ、翠玉に対する彼の執着は更に強くなったと泰誠は感じていた。

執着と言うべきか、溺愛と言うべきなのかはわからないが。

多分二人が本当の意味で一線を越えたのだろうと、泰誠とそして華南は理解している。

だからこそ、そんな愛する妻を一人激戦となる戦場に送り出さなければならなかった彼の気持ちは、いまギリギリの所にあるのではないかと心配もしている。

今すぐにでも自分が行きたいだろうに。

多くの兵を送ってやりたいだろうに。

北の空を見上げる。今頃あちらでは何が起こっているだろうか。

奥方様が無理をしないといいなあ、まあ無理な話か。

そう心の中で乾いた笑いをもらしたところで、来訪者の気配を感じた。